

市民記者が行く! 広報サポーターレポート



世界最長の漂流から200年 生まれ育った佐久島で「重吉サミット」



広報サポーター
加古文雄さん(刈宿町)

11月16日・17日に佐久島で開

催された「重吉サミット」を取材しましたので、レポートします。重吉は、江戸時代の後期に佐久島で生まれ育ち、15歳で船乗りになりました。文化10(1813)年に乗組員13人とともに船頭として熱田港(現在の名古屋港)から江戸へ出航しましたが、帰還する途中に暴風雨に遭



▲歴史探検ツアーで重吉の生誕の地を訪れた参加者

い遭難し、太平洋を484日間漂流したそうです。救助されたのは重吉を含めて3人だけでした。当時、日本は鎖国状態であったため、イギリス船に救助された重吉は、さまざまな国で長く厳しい取り調べを受け、帰郷したそうです。

重吉サミットは市制60周年記念事業として、重吉を顕彰する市民団体「海の男・船頭重吉の会」の主催で開催されました。

16日は、佐久島中学校の生徒による力強い佐久島太鼓と、この日のために制作し、練習してきた劇『重吉少年』が披露されました。また、朗読村「かくう」による『重吉物語』の朗読、西尾市出身の歌手Vikiさんが佐久島について歌うコンサートや懇親会などが行われました。

17日は、重吉にまつわる史跡や、島に伝わる民話などを巡る歴史探検ツアーのあと、メインイベントの「なぜ今、重吉か?」と題したディスカッションが行われ、重吉にゆかりがある方々が重吉について語りました。重

吉が船乗りとして過ごした半田市からは、前市長の榊原伊三氏が、自らヨットで世界一周をした経験から、海図もなかった江戸時代の漂流の大変さや船長としての偉大さを熱弁していました。重吉についての本を出版した作家の三田村博史氏は、大勢の仲間を失って帰国した重吉は、自責の念にかられて、その後の人生は変わってしまったと語っていました。また、新城市の医師で重吉の研究者でもある村松澄之氏は、重吉らを救助したピゴット船長の手紙、アダムス航海長の記録や、日本人の漂流のことをまとめたブルークスの小冊子に重吉のことが載っていることなどから、重吉の漂流に関



▲さまざまな角度から、重吉の偉業や数奇な人生について語られたディスカッション



▲佐久島中学校生徒による劇、佐久島太鼓は、来場者の拍手喝采を受けていました。

する記録は信用度の高いものであると強く訴えていました。

この2日間で一番印象に残ったのは、全校生徒わずか11人の佐久島中学校生徒の活躍でした。劇『重吉少年』は、佐久島らしい素朴さがあり、来場者に大好評でした。台本を書いた2年生の高須有希さんは、絵本にしたいという夢を語っていました。ぜひ、実現してもらいたいものです。また、大勢の来場者を迎えるため、トイレや会場周辺の清掃活動などを献身的に行っており、感謝を受けるとともに、すがすがしい気持ちになりました。苦難を生き抜いた重吉の生命力や義理堅さ、忍耐力などの精神が、佐久島中学校の生徒に根付き、手本となっていくてくれることを期待します。

広報サポーターは公募により選ばれた市民記者です。これからも市民の目線で市内各地のイベントなどを取材していただきます。